

下諧饒舌錄

911.3

八

上

本公書 王若 之饒

古之歌古玉之記載傳燈錄

玄山の語よあそひく

其書が寛するよ核證

精博俳門古叔鍵文律

の二段以下うすての蓋饒吉

謙辞のい鳴呼公のま
妙みあきよひ張得
の古とさかまく在不
が問ひきと賣達の古と
まくはまく耕よかつて百
萬の師と退き多々七十

の様し下生堂の世の
俳家者流三るもお書
お讀むへ、古本も
強うらむ
文化元夏五

競舌錄 上卷

元木阿弥著

凡例

てふをほのとおひ、白玉園のなしひよとひよとれを
よされさぬ何ともあつてそれよりて定ふかちんあれハ詞の
かとホとをかへ今も代をきに幼童のとむかうてふ
をもとづべきを切字とひりすり切字とひまとの
事ふをひせばあくとひりすり切字とひまとの
かうそがゆる余情をあくめて かくふかくふ かく
引て かくで かくふ ひのを もののとれを かくせ
かくふをもとを 切字とひまとの余情をあくめと
とくよ余情をあくめてあきるはおのがまよんじばにあと
あがれ巴音の例を以て かくふをもとを もののとれを かくせ
まれるはおのがまよんじばにあと かくふをもとを かくせ
とくよ かくふをもとを かくせ

ゆゑ切口格のまゝにひきかへる。是も切口格を
ありりもさへやとすくわゆふは切くふあるあ
切口格をもあれも切くやハおやくタゞのよるう
がりくつめといへ

歌ハ

一遍□

二序□

三歌□

四曲□

五流□

愛句ハ

一席□

二歌□

三曲□

四曲□

五流□

比ノ下の歌を今づくとひけ□下お歌を引の中ちとよて
すハ遍序歌曲流のみり愛句ハ序歌曲のニツモ、あれ
三十一字のまをまうナセまゝこむきハ多くいえどもあ
ああれば経を遍流とへときハ愛句の余情を行はれ
されハ愛句乃てまともとのとぞれば余情はえども
奇も愛句もうつもてかるよきよくあるものこそ向の牛す
よりかくハされすり切口やハ切字を上す文てやとく切れ

字トハ

くまにつぬふむんゆるりまき 次空

是をかまくりよけかまくとよす文て

くやまやあやトや トや 年 めや まや むや

んや ゆや ろや りや まや トや

といふをやうやうくまよハ切口やをとよ文て下へども
くるぶおにくて切口やとて切るハもくれ一哥とまうと
御引食て元切字ハ外よりかのむまび詞多うきのく

くや 無くともどたまゆ。やをの門

吉来

是ハ下よりよくもくとくもくとくの門をとく
たくくやとゆくがすくにをゆくてふをとくくく

古今
ホのがまことひてあくやと月写神あり山のやまと月くまく
おのがまことひてあくやと山あり山の山時も

まや 犬の泣かしけよや。涙ふる。

史邦

是も 滴する涙の泣かしけよやと切り

貴之の東 奥されよえとこ。梅は咲きよし春よみがわあもんとハモ

是ハトモうとゆく格あれどミハトヘづきて
おやとゆく格あれどアハトヘづきて
おもいから格をあらハナれり

まや 枯木す玉霜よ触よや。かうるる 枝風

是も おもむくす。枯木す玉霜よ触よやと切り

相花 ちうるるもあもれとくす。リスのうみふくらむままでをもんを
是もりのうみふくらむままでをじるがちうるる
もんをとくす。アキギヤとゆくま

まや 老が才小ちをばよ。中

是も 老う才よけとれ花ちをばよ。やと切り

闇夕

金葉 まにまくさく序の度乃あく波ハタケト。神のめれもとをまれ
是ハ神のめれもとをまれまきよきくさく序の度
のあく波ハタケト。やとくの中乃あく波ハタケト

つや 我ホきが宿すも來つ。けはせ

貞徳

歌古歌 まにまくさく序の度乃あく波ハタケト。ハツヒヨシ
是ハ山乃あく波ハタケト。ハツヒヨシ
是ハ山乃あく波ハタケト。ハツヒヨシ
是ハ山乃あく波ハタケト。ハツヒヨシ

まや あり香の花もちうぬや衣え

畫兩

是ハ衣えうりうみの花もちうぬやとゆく
おおきとくす。とくす。おおきとくす。おおきとくす。おおきとくす。
是ホヤア格をあくたれ。五のつす。かくす。

まや

まく声のほふ様よや。部公

まく声

是も同^シきに一声の口^ヒ横^{ヨリ}あ^ヒと切^{カスル}

千載^{チサツ}にまわるやあぶやいふあるあらめくみとせ一^ハはれのま

是^ハあらみちのまことす一^ハあぐれのまこと
めやいよもとすと切^{カスル}

むや 次^{タマ}種^ヒもとふよをうむや 鶴^{タカ}合^ハ 其角

是^ヒもとひう合^ハは死^シもとすおがむやと切^{カスル}

古^ハえう葉^ハの水^トどもむやはよせきうけとおとん翁^ハのまつ^ト波^ハ

人^ハ んや

古^今波^ハのまつ^ト波^ハ波^ハ波^ハ波^ハ玉^{タマ}をされり
けんやとつ^トハ波^ハ波^ハ波^ハ波^ハ玉^{タマ}をされり
けんやとつ^トハ袖^{アオケ}をされりんやハミ^ミを切^{カスル}ふと
ハミ^ミをされりんやハミ^ミを切^{カスル}ふと
もとうれくもあくド^トとく^トのうや^ハのまつ^ト
まつ^トけんや^ハキ^キや^ハキ^キとソハ^ハき^キく^ハまつ^ト

のくろ^ハのまつ^トあるとあく

ゆや 駕^カ昇^ル乃^ノ肩^ハ小^ハ差^シゆや 更^レ衣^{アラハ}

是^ヒハ^シ之^ノ之^ノかうきの肩^ハ小^ハ差^シゆやと切^{カスル}

は根^ハ敷^{アシ}あらぬアゲミ山^ハのけ^ハましん本^ハせるが^ハれの墨^ハ戸^ハゆ^ハや

るや 育^ハ扶^ハあさるや^ハ古^ハ草^ハの木^{スド}、 關^カ持^カ

是^ハア^ハア^ハア^ハのち^シト^シう^シのあ^シア^シア^シア^シア^シ是^ホ

うの中^ハち^シト^シか^シう^シと^シめ^シア^シア^シア^シア^シア^シ是^ホ
ユ^シる^シる^シハ^シめ^シる^シる^シむ^シ、 う^シむ^シ、 う^シむ^シけ^シ、 あ^シ
あ^シのま^シのる^シハ^シあ^シ、 ば^シか^シア^シ格^ハの^シハ^シ

知^ル見^ル降^ル教^ル教^ル守^ル移^ル席^ル流^ル光^ル曉^ル
照^ル折^ル成^ル宿^ル樵^ル巣^ル取^ル賣^ル遣^ル配^ル詰^ル

あ^シのま^シの^シ字^ハの^シみ^シ切^{カスル}格^ハの^シを^シす^シる^シと^シ
ね^シく^シけ^シ教^ルの^シる^シを^シり^シと^シふ^シつ^シく^シけ^シる^シ
て^シた^シき^シ切^{カスル}も^シと^シく^シて^シア^シス^シと^シま^シる^シを^シ

流ガル 亂ミギル 別ワカル 思オモル 知ニテル 隠カクル 顕アラル

頼タマル トツフ時ハ切リ格のる。是を引ヒトツ
時ハフク格ニギのヤ。農ホのむまび。何ハフシヨ。ト
格アレ。ム上トリ。ギのヤ。農ホヨテカラ。時ハムマビト
ナリ。テ。切リ。ス上トリ。外ヨリ。ク。所のムマビ。何ハ
フ。ムカシ。格アリ。ホ。モ年。下。を。ル。トハ。それ
く。カツ。ム。モ。六。フ。ハ。切。レ。モ。一。ツ。キ。モ。ム。格。モ
ギ。の。ヤ。農。の。ム。マ。ビ。何。ハ。外。ヨ。リ。カ。ム。時。の。ム。マ。ビ
何。ハ。ム。エ。モ。一。ツ。何。ア。ム。ア。リ。

るや 氷より。さ。起。あ。ざ。や。妙。こ。よ。

薦太

是も初。コ。ミ。ア。リ。キ。ト。ア。ザ。グ。ヤ。ト。ヤ。ヒ。

るや 一。ツ。ト。ク。ヨ。捨。ナ。ム。ヤ。道。末。賣。

其角

是も。引。キ。ア。リ。一。ツ。ト。ク。ヨ。捨。ナ。ム。ヤ。ト。ヤ。ヒ。

成

袖。キ。シ。月。ク。乳。ト。ハ。契。リ。お。だ。ア。ム。ジ。ハ。キ。リ。ヤ。テ。は。の。山。で。え

是。ハ。引。レ。山。で。ム。ア。ム。ハ。キ。リ。ヤ。ト。切。リ。ミ。ミ

り。や 前。リ。ト。ア。リ。ヤ。火。桶。ノ。接。ハ。

李。斧

於。達

是。シ。火。桶。の。革。ア。ム。ア。ム。ハ。キ。リ。ヤ。ト。切。リ。

春。の。井。ふ。ト。こ。う。レ。ム。ト。ア。ム。ハ。キ。リ。ヤ。ト。切。リ。

是。ハ。引。キ。ア。リ。ヤ。ト。ツ。ト。テ。少。ミ。コ。ミ。ヒ。

る。き。や 拘。尾。斧。ヌ。袖。力。ハ。ナ。リ。キ。ヤ。

勇。音

け。る。ま。の。き。ハ。ナ。リ。サ。友。の。き。ミ。ア。リ。キ。ヤ。ハ。ナ。リ。
け。リ。ヤ。ト。ツ。ム。ミ。開。リ。ト。ソ。ム。一。字。ア。リ。時。ミ
る。ま。の。き。ミ。テ。カ。ベ。ー。ト。モ。ス。上。ト。レ。カ。リ。ヨ。モ。グ。ボ。ト
カ。ク。ム。ミ。ア。ヌ。浦。の。う。セ。貝。モ。キ。名。の。シ。ト。ハ。少。キ。ヤ。

ミ。去。の。ま。ハ。え。祿。ウ。ヒ。タ。盈。ウ。ヌ。ハ。ア。ミ。ビ。ま。で
盈。ウ。ヌ。ハ。ア。ミ。ビ。く。キ。く。め。

望月

むすうと秋高き。や女房先

左

是もをまふ一ひもくと秋高け一やとかうり又
相とつての里遠ハヤツリイヨクのとく又とよま

あ

お古今人をれしみびよ

都もあいやとだもとをきよびくをあは

きの秋もあいやとだもとをきよびくをあは

くすみうべよ。やと切うきく
かうやハ右の往き渡うせごとくづよもかうがま
くとくのうちとそゆうへまくわくは切うやまと
秋高のやろまとあくわれど切まをうすえで切ら
をうすえとすくすく秋高のやもかうやあれもそり
中は秋高のやあぐよかくとく秋高のそまる
るやもあく。川や引よや川や一トニの
月や思れりや我引やまやまうす秋高のや
うれどもかねぎとくとくをく

○歌

歌のやハ秋高のとよつまてかうればほく格をも更
てやうりし又切う格をもとよとく秋高とハめで
たまくすもかあきくとくもよくすもあーきすも秋高を
ころとれぞもんじほモモ秋高のとよつまてやと切うと
とくねべーとくて秋高のやとてかうひやのやのとくとく

歌

初秋のねまゆすやまむ審羽

をせ代

是ハゆく秋の青みうへだたのりや。とかうすとあ
けり秋のとくのよもとくべー。周みくんとく
くのあいぢよけ例あい是ホの引を叫びてとく

歌

まも月や聲をとすあきりし

其角

是も聲をたそぐきりくにそ聲までてあくいまも月
やあと秋高のとよつまてかうとく

歌

名内や桔梗刈草をまへ

更登

是ハ桔梗ハ接梗と見えらるかやハ刈せ茎と刃にて見る
をもれ一とえヨウハ名月やあくと新月のまゝ
つきすわづり

故思や

持ゆめる世のうすやまと拂

草ち

是レ引拂ひもてあらぬのまよや。トカツリシルハ
せのあくはりつゞ新月のまゝけやを新月のまゝつ
きそかくやとおきものハヤヒメソクハ切くとど
故得るる。レ、おきう新月のやう切くまうハ

金葉

あすは

やこあまごのまよをよゑせよとすまなぎう

是ハ引拂ひのまよをよゑせよとすまなぎう
りくはくすやのとくらうとてかく

牛糞

エリシムの下無のうす拂をあれまよ。ハヒキモト
是ハ一夜をうよとくぬのまよのまよのまよ

切くをあく

△なむりやハジギのやともどももみタもがく
をもともればあぐりやとつ。一奇のやも。やと
國郡名和地名又古く云ふもれる例を以て多々
のあぐりやハジギもとあるもあつて新月のやよま
安ぐれどももくやハ切くわあれがあぐりやの下ハ
クカクビ切くはありスホシリヤの下よ勤ぬ向も
單りうらハナハナ九二千の格あり極くあぐりやよハ代下
をつ

△ 今年や△親よち發を限リ。 越人
是ハあぐりやそかれがきバ下ハをトカクたれば行の
からそりよと切く

△ 六月や△家ふをおく山。 夏威

是ハ六月や行リ止まゆまくときれたり是ハ
外のうきよてくと切く

名月や海も思ひだ。山も見え。

まえ

是の愛するあらじゆや少し外れたりあれハ也とゆく
かくのへくへく格もありよほまで下れまよ切く

△外丸 名月や海をめぐりて 絶景。

ヨモスカラ

是の愛するあらじゆやよて外ゆかうて景とゆく
くちやへゆると二字入ててあをそび合てゆくと三
十九の橋へゆる言ひてゆくは一まニまニ字を示限り
てきゆゑをそくでゆきあるゆふこれをくゆゆゆあ
さきじもよどて上づくれうりふすりて下れむよびゆ
小橋あり

上引のや、數すそきの時ゆよびゆ。

くもつぬふむる

此生

一

是のや、數すそきの時ゆよびゆ。

格あり

けむよびゆをくまうぬ。ふむるきー。○とゆき
切つてゆりてぬハ不のぬきの程。トハ云々と
口をよしゆく聲ゆ。

上引をそくち時ゆよびゆ。

けせてねへめ

正義

一

是のや、けくのちゆき。せハきのちゆきてハづ
をゆき。ねぬのちゆき。へふのちゆき。めいじゆ
はくきれり。のちゆき。けむよびゆをけせ
てね。へられ。トアを切つてゆよびゆ。
是のや、けくのや、數すそきのむをし。もがる。とくね
りきのうりよ。隠れとて。年月を。くよくませて
ゆき。あとと。そくへうちおう。ハがもの。署言あれ
うのうをふる。ハがくく。むね。トス。トよりから
時。止め。せめ。まのめ。くごい。め。ハ。んのまくき。そ
そんせんまんのそらめ。用め。胡め。けめ。ハ。らへ用

がくさんのかいせん。かたのがかくす。かくす。
ひさみのゆうふくとゆのむかはるかく。
きうじゆのゆうふくがのうし、白風のゆうふく。

上へ
くさきつゆくよゆるり集

おうかくとくのやうにゆく
をともへとでだゆくまくらうす
おがくとくとくくはくくはくくはく
ゆくよゆくよゆくよゆくよゆくよゆく
ゆくよゆくよゆくよゆくよゆくよゆく
やく下をくくくくくくくくくく
やく時をくくくくくくくくくく
くくとくくくくくくくくくく
くくとくくくくくくくくくく
くくとくくくくくくくくくく
くくとくくくくくくくくくく

時をくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

○十八九の格、芭蕉菴桃青が能諧解記の中
十七字乃至十九字の常十八九字の格
との落十字二字入て或三字入の十九字の格

十九字十九字十九字十九字十九字十九字
十九字十九字十九字十九字十九字十九字
十九字十九字十九字十九字十九字十九字
十九字十九字十九字十九字十九字十九字
十九字十九字十九字十九字十九字十九字
十九字十九字十九字十九字十九字十九字

是ハ下より上へもちうて坐すあれハかきの
湯をやへ山や花。。おらんと二字入てらんと
尔をはを含せえすままで二十の格にこねらまぢ
らへて上よ裡のつうぢる所の内をひひなうせ終とお
べく羽を入れ坐までもそきとのよえようほりよ
きひじて一字ニ二字三字迄は限りてあれハ十九
二千とづふとくひて余情も四字の詞ハのをざつあ
とくねーと字の余情を入れ坐まのすハ

や
風雅
花や煙

時々やト
煙

時々まうりてまをしぐば時一ぬ寫生のま秋
さゆふま風花や。まや煙とゑうくうし
音。まくん煙。あくんと二字入て坐まくは三字
入て坐まとの例あれば坐白ニ二十の格ありとも
ベーは格ハもぐて前も坐白も動くぬ行玉
萬葉のうや一字ニ二字三字迄は限りてことをが

入て坐まく動くぬ行く八字の訓す切う格を
かくぬ字もて單うくるを動くぬ行もて單
うくうくる上よりおきりよひじて一字ニ
字ニ字入て坐まくは

外十八

人よ歌を買せよ我ハ年忘

ス

をせ

是ハ別のうりあれば玉と單うくるもと一字入
てておをもが合て坐まくは十ハの格くけむと一字
入すともると二字入るもハ上よりおきりよ直ハ
上のうり行くのや。歌ホの時ハあく來歌とむぎ格
上のうり外もくる時ハ。歌來歌とむぎ格

されば坐まくもと坐まくは

葉詩香草。葉の趣よたきりのを

モセ

といへり是も外のうりあればもとひじてゆきけ
やハもぐむや。もくとやとあくまてうのひく

おくのこかで切れもうござりもせばモノをまの格
モハあづくぬやうてまのまくがまよすりて
並やくもとからひけつたりてはゆ。あされ
バ文章モハあれども亦多くまくもいり
もくめーもと一字のまくと二字よりよハリ、
まくめーもと一字のまくと二字よりよハリ、
まくめーもと一字のまくと二字よりよハリ、
まくめーもと一字のまくと二字よりよハリ、

／＼おかりまくひそ

外千歳

山

山に岩あるはままで夏の外物の日くれ声。ス

是ハ山のまきりかりしれば是モ山のまきり

声とソよ下へもと一字入てゆきそ

又くびのやうがるは

や十九 水窓あくと人の心をねぬ泊

ナセ代

是ハくびのやうがりかりしれば泊と音くらふ
もとニ字入てるとして音をなす合てゆきそ

て十九の格くくびのやうがりてもると通れるま

古今

あーりの山ほまく我ごとや君よまくつゆくも

室治法音首

又くびのやうがりてかみの河もとまくもく

や

山のまほをあくとてうるあやあまのね衣。

是ハ衣と音くらふとあると二字入てゆきそ

○切や葦子の聲も思むや好風

式え

是ハ羽の風もとめ子のひげもくらむよとからひやうけかりやの格とあくとてえもんハトヨモクビの
ある格とリ合て子のまくはまく乃列あるを見え
るるもの

十九

伊勢旅を差ぬぞまとの津扣

た

其角

是ハぞうかりて初のみ詞と扣とありくらふと
あると二字入てるとてホをえだ合てゆきそ
て十九の格く

(乙) 古今 神を月時よりおくるあく葉のよかに富むちすと是。

是もぞぞりうりて是と並りて下へあると
二字入て坐とく

○切立 たゞみめハ我事の流で紙食スル

喜良

是ハ御やままくみめハ我事の流で切立と切立と
まぐて切立格の上のうりよ、うりよ、只を控へあく

巻十九 春の樂の多れ、初秋乃堂祭スル

喜良

是ハ數の内にてたれ、とつとつかりて是と
並りくらべ、もると二字入てるとて亦をばを
合てゆき坐て十九の格く

○數

はまゆがきある山をもまた見るもいの波乃あは波

是もいと数の内よりかりて波と並りくら
べ、あとニ字入て坐とく

○切立 猿たの山ゲヅヅこ絶代守

正義

是ハ絶代守するも山ゲヅヅことかうかり、數
と数の内にてくとえ合てゆきく

二十九

それをこそ荒れたりとせの宿スル

喜良

是ハ山よりかりてもとあつてくらべ、あれと二
字入てれとてホをえ合てゆきくまで十九の格
く又引くとて切立とつとくとハ例かくこそと
單りくらべ、も十九二十の格あり

○切立 玉黍飯ハ稚より蓮小こそ

作者未知

是ハ玉とあつてくらべ、あれと二字入てれとてホを
は合てゆきくまで十九の格く

あづらぬは小年ハ達めがるものとの上より立ちそと
是も二とあつてくらべ、あれと二字入てれと

て余をはば食て喫まし

まつるもこととありしもへりへりをくわへられを
そととありしもまつてこれあれあまじも涙を入ては
まもまれがればいどもじ初共首尾とつあの中へ
ひひおはて余をばとありて

●れどもハ松のあひむりアヌウ れ

トあれども是ハ例あきすとくけれと入てはと
ひひきとそりよ度びがことあり初の是尾とりか弱
ふきすとくうさきことりもゆくとくとくとく

トもまつらのとくのとく

●因子は浦すうち安てみれがれりこ

けふその下へ句を入てせんよハ到ハれ。と源人や
又赤人よくよされれといは人や句の玉の猪

●千音萬
荒あらへてもちぬ紫の声もさだよまのくさくふく

これくとものとく

とくうきハ引との下へ引うれと四字入てまつま
こまつまあるまつてこそとありしも二字三字止
の余情す限ることくねば

外十九

叶葉もスナリ五
おあ車

イフ

枝風

毛ハもようかりされバ外のうりく車とありしも
トヘソと二字入てかとて余をば食て喫まし
モ十九の格く

○外
猿古ア

叶葉もスナリ一曲をうけて天をせざま乃上も沖は白波

是も毛ようかりされバ外のうりく波とあ
りしもトヘソと二字入てせまし

の十九

あら葉もスナリ葉も葉も日光

毛森

是ハのうかりて毛とありしもトヘソと二字入
せましモ十九の格く

音格子集

意格かくしのうは、意格す同一格の事も、

新格 拙枝子舊の事づけ。林公書

入
之
也
也

遇
也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

也
也

外十九

山相

新古今

ちりかくあまうだれぬ大井川。づれみをまよひの柵。

カミハ

是よりれと歎す。柵も廻りて山へ
あぐんと二字入て廻らる。

(三)

原氏葉集

あはれをいはせむ。元のゆくへまくやあゆみ

ね

(三)

忠良直子

さむきのわかな。

新古今 織つひあぐらをもむらみ神のくふ

是ハこそのむきし句を。又まわあれとりふけ
をふくませる者こそもあらうの格と固ドある
これむちび句をあくまくる格といひべし

(外)

新古今

さくらの御所の宮ハ御まじてよひひたを浦のね

新古今 是ハ河のまきうがりくわればかのうりく風と

(外)

松尾

あくまの年立うる。うめうきくまね。まよひの

新古今 落

是もまたよひうりて外のうりく声とありと
下へあぐんと二字入て廻らる。

(外)

合本

ゆく人とりゆ。理さよ申よ人のまろをこうに本れバ

新古今 是もむちりかりくれば外のうりく。理ト

あくまるとありと二字入て廻らる。中よ人のらをとりふまれば益くとつむほ。
あぐんと字入てけあせ格子細る益くハ

外十九

是もハと斗。光の草木山

貞室

ころくもくの中るよてゆ。とく斗。光のとくづ
ざる西よしをつぶべ。ともうちくとく光のとく
せよ山されつぶべ。とくもとくとくとくの格あり
けれハとよくからく。神ハ外のうりく。平とあぐん
下へあぐんと二字入てゆ。とくおまほを全くす格え

け外くまくは格子をもてまうよがを引合す
うふあるてふを波の限りをとすれへあむて
いはべー抑御文ハえのづつよきよくもくす
足するよハ行まうをされまゆるいのともがくよん
まよもよれハ行まうをまくすよきよくもくす
くまよつまばらまくすよきよくもくす

饒舌録上巻目録

そのや敷ホソ例

十九のひ

ぞおむもび辞

二十二のひ

そお部

二十一のひ

のお部

二十のひ

やお部

十九のひ

かお部

六十五のひ

敷詞お部

六十七のひ

そのや詮跡例

ハ下ふむきび詞あるぞをつ

の
づかぬのあくべどとりよきやれふ又がとつ
べきやれふをかゝるのをりよえりづりようのを
もりふあう

や
ハ下よひまひ詞の行ふきびのやをつ

詮

ハづづづづれいづづづづ
がぞたれたがたをなづむひきび
詞を一ふねとひて下ふむきび辭ある詮詞
をすすり

○詮詞の下よ。文字も文字又は字とあるがまたて
下すもきびよかづけたま紫あうと名づて中す

粧の下ふごと下シテ下シテも下シテ粧のまのつきて下に
むまびシテ約のあらもれられあれども粧約の下シテももと下
はまて下シテのむまびシテ不及シテ約ありと約シテべ

いよしも。たれも。ソミシも。たがうも。ソウモ。ソウモ。

いよキ代も。いよも。いく日も。たまも。河くも。

いよも。なれガも。ソウモ。何れも。なしも。
いよも。なれガも。ソウモ。何れも。なしも。

いよも。なれガも。ソウモ。何れも。なしも。

叶れひ粧約の下シテえ家シテ下シテ約シテ下シテのむまびシテ

クツバ

○咲よ他シテ下シテ下シテ粧約シテ下シテ言葉シテ下シテのむまびシテ
不及シテ他シテ下シテりよとハ

吉奉

みちたくのまぶシテおぢシテぞれゆきよふれきす。我あらなく小

金葉

モ深乃まさごの粧シテも下シテあくべつきせすをゆる君シテま代シテ未

叶シテか

さーとこる粧約シテあり

是シテまきざシテの粧シテも下シテあくべつきせすをゆる君シテま代シテ未
他シテ下シテ粧シテくけシテごとく粧シテ約シテ他シテのす成
朝シテなれシテづくシテをシテ下シテ約シテ下シテの
むまびシテ下シテ不及シテされシテぞれシテ下シテのや
かさめシテ下シテ下シテ約シテ下シテ約シテも下シテも
多シテあり

さーとこる粧約シテあり

叶シテか

○粧シテとシテナニトゾシテとシテあるをあるを下シテ云葉シテ下シテのむま
びシテ下シテ不及シテスシテドウシテシテとシテあるをあるシテ下シテも下シテ約シテ例シテ
○粧シテ下シテとシテ下シテとシテ下シテも下シテとシテ下シテイツカく
いわゆシテ下シテあるをあるシテ云葉シテ下シテのむまびシテ下シテの
下シテ外シテこそふうをあるシテ云葉シテ下シテのむまびシテ下シテの
よも下シテも下シテあるをあるシテ云葉シテ下シテのむまびシテ下シテの

数句、云々傳し。かの御抄が本の本の序文である。

（一）
（二）

○ 駐河すづくと、其ノ子アカセラクスアガルトニシスチスリスル。

主イツカ
イツア

アシタツナヒテ、アハラス、アキタラス、アララクス。

ガ

○ 云々の事、其ノ内本ノホトヨスノアハラス。

今アハラス、アキタラス、アララクス。

（三） 云々の事、其ノ内本ノホトヨスノアハラス。

その中詮あらわす語

（一）

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス。

（二）

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

（三）

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

（四）

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

（五）

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

アハラス、アキタラス、アララクス、アラタス、アラカス、アハラス、アキタラス、アララクス。

まむつもつもあづもまむもたむまむ
まもまもまもまもまもまもまも

たのむ

六 んうんけんめんてん
又

是のむいとあゝ固くそのや敷かよりから
時もむきひ匂ハ固ド一ワ詞ある。人をひ匂ハ上より敷ひ
詞あくハ革レバといれどさういはせす。」
の外ハ、これのむきひもあらぐるべ
ス。ふくのふんのや敷ふのむきひもあらべ外のうりおこ

ふくふきの「あん」

木きを下す山のねむぢうちまんあふ。今ひくびの由幸ヨシホ。
ツテフヨウ

のとあれども今ひくびのゆきとつぎてころゑ

よけのとあへてあり

ツ子、あんヌベキヌベシヒミ

このあへてのや敷かせわうせ時もむきひと

あく

禊かきの 里吾ハ
あん テクレ テクレヨ

は禊かきのあんの上みからハがちから時のと
そおきのあんハむきひ辞を下をむきひ格へ

石もさうぢあるてるつるのさやるよぢ やどうちま
くぢうぢうぢうぢう ゆるぢうぢうつりとろたぎ
海うぢうぢうよぢうをぐもろ考ううるよぢ
まうぞひぢうぢううぢうあるばる

比敷ひの引くハソレぬ引を下は敷ひのひハぞ
の門敷外すうかを晴すむきひの時ハ固く二詞ある通

くぢうぢう 犬 てぬぢうゆる至けるあら
たうぢうへれれぢうをる

る けふハゾリヤ敷おのむきひの時つしまをり
すはづく格あ

よきへひらきあきべかふうきあたたつまき志がき
おわきうきおりうき
さーきたのさをつきよびーきさじーきうき
えーきくーきうきうれーき
けれい現在のきとももくごのや敷あおむきび小
ハキとそりと舞ハシキとひきとももぶ格と

外のうち時ハリキとひきとむす間もそれ。意。一。
かかーと理立のト。をむすぶ足りと
かかーと理立のト。をむすぶ足りと

ナーテーこーそーせーそーそーそーそーそー
セー
けれいと去のト。そむくとそむくとトハ差エア
格あり

まーはんのとそ
らーはんのとそ

けらーはるがのとそ

ばニラハシレのむまび
まあるはる

○ナーテーとソーハまでやう搭のト。ナリテキミヒツヨウシモ
○ナーテーとソーハおもき格那ハラキ搭あればおもき格時ハ
おもき格のあまび口玉ももももももき格のむもび口玉
むもびと、

○ナーテーの小サレホのふたのうれどあまびてなと。う人のゑー
是おどと殿口とのとかさあくわれるのハラキ搭
あれば是ハ殿口のむもびとある

ほ探

○風のきよふねとおうなぞくちうめの花のあひて意。
此時ハ外ハうき格のハ外もはおもき格あれハうき
かりくらやうある時ものむもびよしきとむも
定うすらねく是あなぞくて列のや敷口を
木と列と望む時の格とくねべーー
木と列と望む時の格とくねべーー

之抄

くさつをむくる風きよき

(六) 七

廻廊の波音れん海

春香

是ぞうかくとす

(六) 八

風よりかす休

宗久

是ぞうかくとす

九

風よりかす休

(六) 九

風の波音は風

了阿

是ぞうかくとす

十

湖舟の波音は風

十一

湖舟の波音は風

湖舟

天の川の波音は風

十二

湖舟の波音は風

湖舟

上木の波音は風

十三

湖舟の波音は風

湖舟

上木の波音は風

十四

湖舟の波音は風

湖舟

柳の波音は風

十五

湖舟の波音は風

湖舟

柳の波音は風

十六

湖舟の波音は風

湖舟

六む

空よちれ數ぞばがむきのふ

宗祇

是ハ空の花よちれあれぞつがもとゆり

古今我彦ノ都モテモあきらセモ世を活山と人ハシテ

是ハ世と活山と人ハシテ我彦ノ都モテ

もうそもむとゆりとく

六む

今ぞ夕人迷生くつる月よ花

宗英

是ハ湯まくまく方よ花今ぞ夕人とゆり

於迷

う草あくよのをもあきらんを島の神乃なをつくに迷

是シかすの袖の赤でつまてまでうどきくあキ、出雲の

もすもあきらんとゆり

六む

都会あきらじ來う人船のぬ

玄ま

是シ船のあはくまじあきらじきあくんとゆり

けあくハツメのあく

ヌベキ

ヌベシのまく

朝手哉

是ハくノ都のまくまくひもの門をきまん花のなぐさ

是ハ四のうみのうみ中まくまくして是ハ
あくまくなまきとをあらんとまきとをあらま
ぞうかりてもの向きてらんけんあざ
めりくらはづくもくれられが禮前事アキ

古今

老自せよお葉つはく方代をいよふハ神をきまら

千ヌ百ヌ

君がへん千代のよあとを小松原をくほの山もいよふをめを

こねらう二カ角アモモをとひとをとひハサ
追きうりうり是ホナあむくて引のや農
こしけおもき格の向乃三のまくうてう雪
のまくうてくへーもくの雪のあをゆく
單りくまくまくをもすむすあすむまびの格
あいとくねー又そのまくはりんハ雪ウク
ハヨシダレバ雪うそを見えま

ばれ／＼すなよあくまみあくま／＼ん／＼ん我をちかひき

是ハ別とソノべきやされ所をかんとソノけり。のそのがん／＼下もじもじ付あり。こねぢ／＼むまびて。ととえて下へつきて上へぐりて。づれ／＼よけ／＼あまざれある。んと蜀もまくけ。ぞのとれ／＼ん／＼おま／＼すれ／＼是は文章もおほ／＼ああ／＼ん。

古今序

○りつよ／＼とれ／＼る。是もまよへき。
○おお／＼れ／＼とあ／＼ん／＼き。
○そ／＼れ／＼をひ／＼れ／＼ん／＼ぬ。お
○赤／＼ん／＼まう／＼も／＼た／＼ん／＼と／＼か／＼き／＼き。
○つゆ／＼しきせ／＼かれてけ時／＼あ／＼るを
あ／＼よ／＼き／＼め。

せど／＼れ／＼と／＼き／＼を。社落のむまび付をす／＼

る

夕涼よ／＼田男／＼すれ／＼る。

其角

け向／＼かよ／＼けり。とあれバ写／＼を用／＼

古今
冬そり／＼そひ／＼ぬを本のる。す／＼花／＼る近を／＼り。写。

●と／＼のと／＼る事ある

●冬月勢／＼き／＼を。恨／＼れ。

是／＼を。う／＼う／＼れ。と蜀もり是／＼ひが／＼

金葉

き／＼と／＼よ／＼す／＼れ。と桜花於て。はが／＼え／＼

それ／＼へつ／＼う／＼と。むまび付を。そ／＼う／＼あ
あ／＼そ／＼むまび付を。と。と。はまび付を。そ／＼う／＼あ
巴／＼を。れ／＼も。そ／＼う／＼て。と。と。文／＼下へつ／＼け
そ／＼う／＼是／＼は。下へつ／＼る。時。そ／＼う／＼す／＼そ／＼う／＼

る

是／＼あ／＼北里橋の橋を。す／＼り。め。と。初／＼う

脚注

古今

秋末ぬとあよハモヤナリアシス。風のきよをおどろれゆ。

・ そのむぎるゑひ

・ ちむたびよ見を捨ひぬけ。一此。 俗言。か
是ハぞもてうち時ハめり。とももふべき。まき
をぬとももびく。ハとこのまく。農のうり。おぬ
えつとももびく。彦格あれども。そぞくのやう
ニハ彦格也。

る

やま秋日ハ井のこを立す。あり。 羽茎

古今あこととせそひ。みぬをあれ。う。花と見る。まく。鳥を。うけ

る

夕涼おれひを以づる。彦乃。 月内

於連。 おれひの川と。うひ。なれ。は。 まく。お思。人のあく。ま
是ハタまく。み。諸のう。く。を。い。を。い。し。と。か。う。
是ハつまく。もの。おわ。ふ。人の。あく。ご。よ。ま。れ。の。川
と。を。つ。ひ。も。あ。れ。う。と。草。う。き。そ。い。あ。れ。う。
と。ま。だ。う。う。か。ま。も。上。ま。く。ぐ。う。と。を。ま。く。べ。ー

る

子城遠て。まきと。を。ま。す。舟。舟。舟。 芝山

是も。う。う。舟。舟。を。つ。れ。て。う。れ。を。ま。く。る。と。か。う。

千載。 まきと。を。あ。る。う。う。を。が。つ。ま。く。ゆ。う。風。そ。う。ま。く。ん。

る

あれ。兼。ち。る。き。を。ま。す。ゆ。彦。舟。 莫山

是も。彦。舟。夜。あ。の。も。る。音。を。ま。ゆ。と。か。う。

ほ探。 秋。風。よ。さ。そ。ち。れ。こ。る。石。の。を。井。なる。か。ま。く。を。ま。ゆ。

上。う。う。外。の。う。り。比。時。ハ。ゆ。ゆ。と。ま。く。格。く。

金繁。 ま。く。く。も。よ。び。い。む。た。と。代。那。の。花。ご。され。八。月。の。花。う。も。ま。ゆ。
け。ゆ。と。あ。る。こ。と。を。く。も。つ。ぬ。ふ。む。る。と。一。
字。上。ヨ。文。て。く。ア。ゆ。む。ん。ゆ。引。る。ゆ。あ。

ゆ。く。人。あ。れ。ど。も。あ。う。い。ね。て。ハ。と。ぐ。ふ。う。す。あ。う。

まで風ゆ雲ゆ日ゆとありても音
をうけてるべーを上の通りにさよや
くらねべー

五

鶯口小寺をさす夏木立

林泉

是ハ夏木立口は寺をさむと仰うるをの
ヤ敷ふもうちる時ハ引とそとて御ハ居くとも
ぶ格え上うり年のみれ時ハ引とそとて御も見る
たゞる立る御ある引る見る見るも見るも
立りえ又あがきとひもねば一字たぐる時ハあれ
日ざれつ月ざれつおもれつ引れつなどりはあり
れづみゑるも

夏木の川をのみをさむをやれが光りとせ月をあぐる
六

杓柿の名前をうくる小時多

其角

是ハ少しへれつ柿の名前をさむと仰うり

支づくをもあれどもあふ立があるまゐ山の陰をさひて
是ハまゐの山のげをさひつはくをのの
本のもとごとよきよ。とくりて見る
ありけづはでようふづくまにて勺の中
あるよあるづはおやくでよかづづと
あがくとよきよよづあるあづづ
づみゑよもせり

翌き

引焼のまくげをさむきを櫻

裁人

翌き

め菜すり七夕草を愛ふき

考

翌き

佛め神をたまきを鈴の音

末

東今
筑りあくちきめをとくに桜花あつて世中をさのうれを

是ハ竹のまくげをさむきよ。とやす
上より外をうちる時ハ桜花のトモをあもとを務く

是ハさくらん花あうてすのすまきのうれハ
のうあくちをひめでしとゆるまき

登トキ 実はれど二人旅宿をたのりき。

佐々成

志は葉のちみをサヘキ。 昌良

登トキ 郷云あくへ難を、
佐々成

トナリのや、巣あそかる時ハハキトシモ
河ハリキトシモ、格モ是ハハモ既至キモ既至く

トモのんざるハ

・是處のつみを。 うれト月の色

是ハ月よりくりて既至のトモもまびとるがと
のをざるて是ハ月をいふう一語りくろり
東

志は月の光りよしる我おれとがらむをとがるをわき。

志神には秋吹風をあつう。 別

御堂

是モのトハツリテ、格あれど上よりてのや
穀ホ又引トナリて、是ハもまびとなりて、やくも
古今

みどりある紅葉を、是ハ元。 秋ハ色

是ハ到ニワあり下のける事、やくも

妻こよね麻を村むら 村むら 本阿

木

けうとつよじせひ河ハラヒのまきはれ
石を萬そひす萬をもたらすと切く

支シ 川よからまきはる御山のきげれを。 今まきら

ラニカ

引一引一引一ハづれのもとば
あると人ねべ一多くよひりくあれあ
えよひかねく

けら

苦愁の白きを。 苦愁はまく

尚致

志ぐれつ色まきりやく事めの人のやがまじはるよ
是ハトよあをそへう上引のや難あそくら
時の用らへハナレルニのをそるり放及ら
是迄をねうれむとび句を禮す禮すはんまるごとくふ
せぐへをようかりておーとむまびらる事わざわら
後ハリヨシぬももまきようてハキともむまびら
是ハ直段ハコレ限りあきこそのやうふれりどもぞ
むまび句ハ是ヨシくめらばアキモソトヨリカリ
カリをもりたるふき

注解
定山のよみぢをアビガモ月の色れ日がもとてあ
○是より下ハセを切ぬ句もむまびたる十九の格を
外へまくるのをいふをり

(七) 十九の格 是ハ勤め句をもとるをよ

(十九) まびぐて吟をあての時鳥。

尚敬

是ハセよりかりて切ぬ句を 部々とあらう
也。あと二字入てる。とてふとをか食てはま
ミ十九の格くに格ハセのくりよもく此
ハ凡例の中よせやアヌ全ての

(十九) ひきまむまぶ格

四六

月をうむりもがくを須广の浦

典立

是ハ月をうむりもがくをもくしんとくま
きをほテの浦一つひきもくとのくり

是うふんの秋あれば今ひよをよせきくれ上九を

是ハ今ひよをよせきくよせきくれ上九を
差へひきもくとのくり

切子

切子をハ上よりせりよハもくばすを
のうりよかくをもじるもくをくべた
ぞとしむれらす

切子

サガリホテ様をせうで檜木笠

木笠

切子

是ハもの本笠よりれどさくらんせうと切子を

木笠

切子

月の時をちむふをあちむむけ

草太

切子

是も月のときこちむけをもくもくと切子を

草太

切子

詩生をさればあ庇を大根引

理波

切子

是も大根引をまきをさればあ庇をと切子を

草太

切子

是も大根引をまきをさればあ庇をと切子を

草太

千代

かどりよ春れんをねとまへ

市内

切子

かどりよ春れんをねとまへ

市内

切子

是ハ上よ説言うて下よとすをき

木笠

切子

あよこよが荒忍人の長刀

木笠

切子

初葉ふよよとおよひ船の甲

其角

切子

船底よ金華がて

曉雲

切子

百ありていよらがねを度うし

木笠

切子

どちくほうと麻よこと行

草太

切子

是ハ席すと年すとちくつまをと切子を

草太

是の句の中から三句切り、シテタ一まで切
ち句つあがむがす

卷之三
蓑衣着たり。すみるを陶器

昌碧

是ハナリ先のむよつうもと切くまこと
白字がヨツアラスやとあれどもといふやと云
ハ例か一これらへ事一説りありべー古き写本云
ソクシテモトアリて西一書もは例ハドリが
うちの例をとるべー

卷之三
荔草もあ。とすかざれつ

樂飢

是ハナリ先のむよつうもと切くまこと
叶フハテヨウトアリて此のハ上ナカニ私あり
トヨツトリソハ多ハテヨウ所よつ。ホトキニシ
コトナシテ

卷之三
かづいたの神ハジミをあ乃離

其角

是ハナリ先のむよつうもと切くまこと
叶フハテヨウトアリて此のハ上ナカニ私あり
トヨツトリソハ多ハテヨウ所よつ。ホトキニシ
コトナシテ

卷之三
代士よまでニテハシム

是ハナリ先のむよつうもと切くまこと
叶フハテヨウトアリて此のハ上ナカニ私あり
トヨツトリソハ多ハテヨウ所よつ。ホトキニシ
コトナシテ

卷之三
たれきけとあく夜。我宿の尾花がまをとひてす

是ハナリ先の尾花がまをとひてす
てたれきけとあくうりゆゑと切くま
とけ。ソレハシム。ソレハシム。ソレハシム。
切をヘドモソレハシム。ソレハシム。ソレハシム。
ソレハシム。

卷之三
お送

是ハナリ先の尾花がまをとひてす
てたれきけとあくうりゆゑと切くま
とけ。ソレハシム。ソレハシム。ソレハシム。
切をヘドモソレハシム。ソレハシム。ソレハシム。
ソレハシム。

の お 部

くもつねふむる現れ

(五) 春はる日かはる風のゆふ 宗教

春のゆふてはる風のゆふ
ゆふてはる風のゆふてはる風のゆふ
ゆふてはる風のゆふてはる風のゆふ

春のゆふてはる風のゆふてはる風のゆふ

(六) おおきい風のゆふてはる風 仙化

おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風
おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風

(七) 流す風のゆふてはる風 遠香

流す風のゆふてはる風のゆふてはる風
ゆふてはる風のゆふてはる風のゆふてはる風

(八) おおきい風のゆふてはる風 小枝

おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風
おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風

おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風

(九) おおきい風のゆふてはる風 中空 丈岬

おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風

おおきい風のゆふてはる風のゆふてはる風

(十) 島嶼のゆふてはる風 香琴

島嶼のゆふてはる風のゆふてはる風

島嶼のゆふてはる風のゆふてはる風

島嶼のゆふてはる風のゆふてはる風

島嶼のゆふてはる風のゆふてはる風

一
~
~
~
~

廿一 括號歌

括號

~
~
~

廿四 括號歌

括號

~
~
~

廿五 括號歌

括號

~
~
~

廿六 括號歌

水曲

水曲

大山里

水曲

水曲

日知

日知

水曲

水曲

朝朝

朝朝

水曲

水曲

水曲

十九

當局格

十九の格
足

十九

梅水輪

十九の格
考

十九

十九乃格

①

建保四書

水野

二

無名

三

格古

一

梅

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

ひげの格

ひげ

雪月花をよみよ僧の車坂

空山

是ハ花とよ傳づる。とくとくあるを車坂へ云ふ。うそひ

の字あはれ

あれのうご

はまむれく秋も色ぬ。流柿の

宗古

是ハ流柿のいとれて秋もへゆる。とがのまのうかて車ざり

老の聲よをても。秋敷花の

田月

是ハ老の声よちる。老のをくも。あらうととあく。う

古今吹きすせ風をさむみ秋森のうららかに。人のこころの

是ハ吹きすせ風をさむみ秋森のごとく。人の心

うるむ。じぶと別のまことのう。うありうり

好思集

せうじ

弱のまより弱りにつきば。有氣れ淀のまことの

是もせうじせ。弱のまより弱り。すばらやう、

えのつまく。もがり。かとありたり。け格へ上へまち

く

ものうりみる。

ぬ

ねむうりのう。それとのう

うて弱る格とくね。下ヌ。もがふとくね。弱よ

のうれ。辛別も。外。み上のうり。はまく

く

ものうりみる。

ぬ

ねむうりのう。それとのう

や **枝** **郊**

やハアホムモギ辞ある。もくろのやへ

くもつぬふむる茎き茎十

六

く 目れなや 蓼々とがく五月あ

立

六

く 喰物門臺あり。そ五月

立園

是もその月くひあを。門うりあり。く。とかりけ
がのやもをやのとのやくちるハ因る。故署言あり

古今
春

暮あれ鬼山乃まうるをうらむや。色うらりや。

六

く まゐや 苜をのぞ毛草共

立

是ハ暮れもまゐや。苜をのぞ。とかりうらりの
やのそをもくとなくしへけや。をうかくて邊の切下
へ至て。まゐハトもぎをのぞ。けり。と見る時ハくこ
のまといは安。されどやとよぎふをうとハリ

六

く 浦風や 巴川くづむわくすも

立

是も村ゆく浦風や。巴をめぐ。とかり是の所は
あざり。あるもどれも。うらのやと前のことく不
て村ちう浦風ハ巴をくづむ。うとそねばうと笑
やまく

六

く 蕎や 四季歌 うそ馬の詠

立

篠原
浦風やと木ノ波。木ノ波の浦。あくすも
是も二三の経つぞ。平田をおくる。とかり

是ハ上の山の名ひのやをまもむじて下の
かりりかでりふとゆうて

六 つ 波 や し な が よ は い ぐ 村 ぢ り 每 朝

是ハ波をよきく村をよはる。まくさうへゆり
六 つ 食 や も う 味 喰 る こ と せ き き く ま 其 角
是もみそくをよきくにあやちうとゆり
六 附 あ や ま い 略 あ ゆ 月 を 山 の ま ま の 里 ふ お そ り や ま

不 収 明 早 や 横 さ ざ め ん 山 え る 其 角

是も山えり明早や。まくさうめにゆうり不のぬハ
つひよづく格あれ。そのや類ホトリニ鷲ハ也
ひときりてゆく

是れすすみのまのまきよまくまくとあんや。称をそそごぬ
是へよしのゆやそト不をじゆある。足りく
けれやハれば事のまのゆまく。不を署すり

六 ふ ウ や わ ゆ と も る く ま ね 秋 の 月 宗 祇

是もこよひくよめ秋の月名を。やよとゆり

六 ふ ロ 鳩 の 名 や セ り あ と 時 鳥 如 雪

是もほくよめ鳩の名を。やせりあふとゆり
たのむすはれのづ。地あは千年もがて阿人全より

六 む 水 や の む い 用 も と て 涼 ま す 雜 無

是全用もとて涼まさる。のむとかくうけくを初の
首尾共申ふ。食や乃禮。由生にてけやハ。其の切字
もあらとあれどもよきしのや。あれハ下はむとむを
ひ初申ゆ。かくとくけ難ひのう。うのやハ。若やま
はやこも月やまく。人やこぬ名や。口ふ人やま

見ゆる人よ。おまかせ。おまかせ。
かの御事。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

六 手 錦の手 紺縞の手

是行の奥に手をもつて。おまかせ。おまかせ。
はやく、手をもつて。おまかせ。

古今
手をもつて。おまかせ。おまかせ。
是の手風の手も。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

三重の手
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

六 手 古の手 古の手

木都
手の古の手。手の古の手。手の古の手。
手の古の手。手の古の手。手の古の手。
手の古の手。手の古の手。手の古の手。
手の古の手。手の古の手。手の古の手。
手の古の手。手の古の手。手の古の手。
手の古の手。手の古の手。手の古の手。
手の古の手。手の古の手。手の古の手。

六 手 女の手 女の手

おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

角彈

(六) 五

傳説の事

世人

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)を
是る事、(其の事)の事、(其の事)の事、(其の事)

(六) 五

傳説の事

一般

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

(六) 五

傳説の事

智日

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

(六) 五

傳説の事

本末

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

古今 七夕にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)
月 月にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

接

古今 大きな事無く、其の傳説は、(其の事)

月 立田川 水無月にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

月 手に持つ事無く、其の傳説は、(其の事)

(六) 五

大鏡

野水

接

古今 公都にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

月 公都にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

月 満月にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

三

金持

月持

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

是にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

接

古今 陰陽にあがむ事無く、其の傳説は、(其の事)

1726年

3

陽水の用事

荷分

是の上にげんの事は

1726年

3

八重葉の九月の秋物

養紙

是のあらわすは假にいふてはるが、されば下の
やうにほんのほんの土のいふてはるが、
よしとひをかへてはるが、
もととくにほんの土のいふてはるが、
もととくにほんの土のいふてはるが、

1726年

3

木落葉の落葉

其用

是のいふてはるが、

● 木落葉の落葉

木の葉の落葉のいふてはるが、
不及あらひがれの落葉のいふてはるが、
葉の落葉のいふてはるが、

1726年

3

山の小枝

小枝

是の山の小枝のいふてはるが、
の葉のいふてはるが、
葉のいふてはるが、

古今

葉のいふてはるが、
葉のいふてはるが、
葉のいふてはるが、

1726年

3

田植の田植

正秀

是の田植のいふてはるが、

株

是の株のいふてはるが、
又中立のいふてはるが、
格のいふてはるが、

吹風や

是ハ昔の山やまの花の白い風
やまの花の白い風

千載をみかへて

はなれば、神の香りをもれ

是ハ年おきばかり、神の香りをもれ

えどすまやまの香りをもる。

古今の日あき、我方をうへとまくねぢやあれあでありますかくらむ。

日あひきの山やまの花が、やまの花の白い風

はまの花の白い風

古今春玉處の花を、山やまの花あき里よまみやなづる
ほせんの花の白い風

ほせんの花の白い風

井ハ木とれども、水が波打つ

井ハやうるこ

望

き

山茶葉の花や、すき、風

嵐

是ハ山茶葉の花や、ありまことかく

望

き

名月や小國日和まごめ形き

名月

是ハ朝やのものや、名月も、小國日和も、ある格
べきのまごめ形き、(きのつ)ありくるまごめ形き、(きのつ)
まごめ形き、(きのつ)ありくるまごめ形き、(きのつ)
まごめ形き。とせられば、上へはうつむき、現在のきと、隣を
の。乃格ハ

上ぞのや、(い)うる時、現在のきと、もまよ格
上外そから時ハ

理至のトヨアキモ格

テ本も写すも、(と)向う。

あやうく、(と)向うのやうに切りとまれば、下へ現をの
うり

・ととのそよぎ、
・あやうく、(と)向うのやうに切りとまれば、下へ現をの
うり

・あやうく、(と)向うのやうに切りとまれば、下へ現をの
うり

けをきくや又字ニラキのうも難ト。れども、先令
ハ況あれ、字の訓く上のやハ數のやあれ、現生のまゝ、
てむちぶべき格あるを現在のト。さてわたくしハ、この
もじは、口を口食ひのやとめらして、うがいのやと
ちうぢる故、うるせりも有ぞ。一あらまき、言や
うをき。うそ、まみえとあるハ、人もかねき奇こ異、
コナガタて誤りあるすを知り。

万葉
かくしてやあほやをあへゆき、大あほやすくからあがよ

是ハ、うごめのやニツを一つのむちい間よてそのへ
りやニツあくてもうくつよ例もあるべ

墮き 東やとき、極もや至き。耳の音。 莫山

是ハ、うごめす。と、極もや至き。耳の音。

墮き や麻石具ね。と、や。玉祭。 去來

是ハ、モナウ。御名のうそ。 や。と、や。

墮き おみ葉。と、風。たを。此刻よ。 岌雪

是ホもよき。きのとおきく。

墮き 麦泣の田植。出をき。當時。 許六

は、機。声もだりぬ。もん油のうそめハ、君が女ひの宿。やまくれま。

多々、泊。さかゆゑ。一きとあそび。じるハ
りく。あれあり。せきく。あき。い。重く。ふき。まのまの

墮き 子絵木。風。晴。き。岑本。木。票。 淡花

是ハ、うの栗。子。ども。ら。風。や。れ。き。と。か。う。

古今
秋。糞も色。つき。め。れ。き。り。に。お。糞。ぬ。と。や。よ。う。う。き。
上。う。ぞ。の。や。糞。ホ。キ。く。ち。時。ハ。ハ。き。と。い。そ。
う。向。ハ。ハ。き。と。あ。そ。ぶ。格。こ。け。徳。う。も。糞。も。か。く。き。の。ま。あ。り。

墮き 木。ぐ。り。よ。匂。い。や。付。一。拂。花。 大糞

是ハ、く。り。花。匂。よ。す。ひ。や。つ。そ。ト。と。か。う。そ。の
い。い。そ。の。あ。そ。び。よ。す。ち。る。と。ん。ほ。べ。

卷一

毒ありとせらるやれ。女房也。

荷弓

是ハキシホー。あホーミ家アム。くホ。トヤク。上
は松き。下の花をほみーに。ハロギの色。やスホ。山ホホの花
是ハヤマホキの花色も。アモー。トキヒー。アモー。

まー

古事記をや。ブヂョー。ミヅヒウ馬。洞月。

是ハキシホー。カクヘ花。ブヂモー。トヤク。ブヂモー。
ブヂモーのとくわいのヌー。まく。

まー

ホホホホ。等ホホホホ。花代。舞石尾。

古今。ち。あれバ。有。向。そ。の。行。ギ。ヨ。コ。ホ。ヤ。ツ。テ。ホ。
ち。ら。ん。ソ。の。ま。う。り。セ。の。ヌ。ー。る。そ。る。外。の。ヌ。ル。こ。是。を。
ニ。ミ。ク。ー。こ。

古事記。三の川。うき。れ。波。よ。青。里。の。萬。む。し。舟。人。や。こ。ぐ。ら。
フ。ミ。ク。ー。オ。ア。ン。ウ。ー。の。ま。く。
この。じ。ら。ー。ハ。こ。ぐ。ら。ー。の。ま。く。

や十九二十階格

ホジホサ。ヤ。を。動。ム。間。テ。モ。モ。ハ。格。ト。

や

二十 風流のホー。奥ノ因極。唄。

ホモホ

是ハキシホー。や。う。う。う。て。あ。ぬ。行。ト。唄。と。歌。リ。る。
下へ。あ。ら。ん。と。三。字。入。て。て。余。を。ほ。を。今。す。ま。よ。下。
二。年。の。格。ミ。は。萬。ひ。を。ふ。の。カ。ト。モ。ソ。ト。ハ。九。例。乃。
牛。ホ。カ。ー。これ。ハ。ス。合。べ。

や

二十 薩摩小綱。アホヒ。終。ヤ。是。

曲翠

是も。や。う。う。り。て。是。と。首。ホ。ト。ア。ロ。ン。と。三。字。
入。て。モ。ホ。を。底。を。合。て。サ。ミ。モ。ト。二。年。の。格。ミ。

や

二十 義。ト。ム。ア。ク。ホ。ア。ホ。ア。テ。莫。烟。

軒柳

是も。や。の。ア。リ。ア。レ。バ。細。と。高。ア。ホ。ト。ア。ロ。ン。と。三。字。
入。て。モ。ホ。を。底。を。合。て。サ。ミ。モ。ト。二。年。の。格。ミ。
ホ。ト。ム。ア。ク。ホ。ア。ホ。ア。テ。莫。烟。

十一 是足氣雨入其角
十一 老也。十之格也。得也。
十一 有源一也。十之格也。宗也。
十一 月花の咲く道也。十之格也。低也。
十一 底山也。十之格也。底也。
十一 秋風也。十之格也。木也。
十九 其角也。十之格也。阿也。
十九 小山也。十之格也。木也。
十九 摩也。十之格也。其角也。
十九 岳也。十之格也。岳也。
十九 桥也。十之格也。木也。
十九 阿木也。十之格也。木也。
十九 摩也。十之格也。木也。
十九 其角也。十之格也。木也。
十九 岳也。十之格也。木也。
十九 桥也。十之格也。木也。
十九 岳也。十之格也。木也。
十九 摩也。十之格也。木也。
十九 阿木也。十之格也。木也。

十一 是足氣雨入其角
十一 老也。十之格也。得也。
十一 有源一也。十之格也。宗也。
十一 月花の咲く道也。十之格也。低也。
十一 底山也。十之格也。底也。
十一 秋風也。十之格也。木也。
十九 其角也。十之格也。阿也。
十九 小山也。十之格也。木也。
十九 摩也。十之格也。木也。
十九 岳也。十之格也。木也。
十九 桥也。十之格也。木也。
十九 岳也。十之格也。木也。
十九 摩也。十之格也。木也。
十九 阿木也。十之格也。木也。

奇可ヨハ

文多モテは引く歌う。次を引筆の筆介はおのとぞくせき。

是、近とありて下へかゝと二字入て字をこ
くらべのうかりて勤め行すてありたれ
どもよすが近とありて例をえむ。

や十九

角力取あらわや相のり浦。

嵐電

是し浦とありて下へかゝと二字入て字を十九の格
は勤め行すて角力取の格は健うのうと一の白づくを
もる二の白づく又もとよおりてハ白づく申写すとも
あるすあくテ年少の白づくをよみ。

や二十

山やちあわ紫吹くぬ嵐れ

化和

是ハ山やちあんあま紫吹くぬ嵐れとあることえは
上より下へけたぐハ口答のやとくと同ド 鼓のや
を勤めぬ詞をもとあると下へかくと二字入て字を
て字をもとをえてゆきとよそ二十の格くけ格ハ一の白
づくも二の白づくもかくつあがおきとよそとう

て下う上へうちくーてやくも角
きあ花な花やも水やかさ
花やま花や花やとよままで上へ下へ下を上へようは
時ハあくへと入て文字よもをつくーとくとていくと
秋やらまやらとよはやのむもびゆきむもび
切まをとらや秋。とらやま。とくバ勤め行す
ありて十九二十の格あれどもとくやまくとよま
とあるありまのとくや秋のとくもとよまるとの書
まを里えさればとくや秋たちやまとよま
とく宿ベー又上う引くがいのや 講言ふたりうす
時あくび行のくもづかむるよハすきよちて
くらべのとくくらぶのとくのとありますとおきとく
足はあくべてとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

江戸

の け て す 代 し か く い 繩

可 全

是: う た て す 代 し か く い 繩
か く い 繩 く せ き く せ き く せ き

江 戸

山 え い て す 代 し か く い 繩

立 圈

是: 山 え い て す 代 し か く い 繩
圓 え い て す 代 し か く い 繩

江 戸

綠 あ い て す 代 し か く い 繩

件 六

是: 緑 あ い て す 代 し か く い 繩
角 あ い て す 代 し か く い 繩

江 戶

緑 あ い て す 代 し か く い 繩

宗 氏

是: 緑 あ い て す 代 し か く い 繩
桺 あ い て す 代 し か く い 繩

江 戸

桺 あ い て す 代 し か く い 繩

金 金

新 金 金 の う; 宝 売 金 金 の う
金 金 の う; 宝 売 金 金 の う

○ 金 金 の う; 宝 売 金 金 の う
金 金 の う; 宝 売 金 金 の う

○ 金 金 の う; 宝 売 金 金 の う
金 金 の う; 宝 売 金 金 の う

○ 金 金 の う; 宝 売 金 金 の う
金 金 の う; 宝 売 金 金 の う

是: 金 金 の う; 宝 売 金 金 の う

刀 刀

刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀

刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀

刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀

是: 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀

是: 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀

くや 春めくや人さあ お伊勢かゑ

荷弓

是ハ人まわせをゑりきめくやとゆう

くや かり落しゆ。や廣世の麻の角

澤雉

是も廣世の麻の角うり落しゆ。やとゆう

くや かごんとまねばう。や田植

吐月

是も田うき立うてんとまねばう。やとゆう

くや 葉様よ花よさく。や 初鷺

高山

是も初鷺をさくよさく。やとゆう

くや 作日本の魚をゆき。や 秋風

嵐雪

是ハ秋の風つくり日本の魚をゆき。やとゆう

くや あきうらせはよかく。や 枯尾

其角

是もかれえよあきうらせはよかく。やとゆう

まや やぐて満る山をさく。や 三の月 ひ由

是も三の月やぐて満る山をさく。やとゆう

くや 枯たてゝ霜よ風よ。や 女郎花

松風

是ハ枯たてゝ霜よ風よ。やとゆう

くや 老の死小敷とがく。や そばも

國々

是ハ老の死小敷とがく。やとゆう

くや トモ。下。年ぬや。ゆやりや。三。計。ハ。と。く

ト。句。を。出。そ。う。た。切。字。を。え。ぐ。る。を。き。む。る。あ。る。

トの里語ハ **マイ** の **まこと**

まくとまく。や 四月のトサ山

燧外

是ハ四月のトサ山をまく。やとゆう

くや 十五日。や。勝月も古手賣

老義

是ハ十五日勝月も古手賣

下。十。五。日。の。ト。サ。山。を。ま。く。と。ゆ。う。

早

暮も時をさうぬや苗代田

空山

是ハあそら田苗もはとおりぬやと切り

夜 桃色の歯よとくふや秋の音

前引

是リおのれまほゑの歯よとさうが。やと切り

むや 総栗を袖ではむやすり子

秋村

是よりゆづき袖でつしやと切り

ゆや 壇火もまかや後不窓する

前代

是もあそびよ喜るちばたとまゆとけり

るや 乃言を寐てあそぶ。寝度春

中波

是より反生補力をもねてゆく。あと切り
る。ゆつくるあるけるある。あくめおじよはく
字の訓よおづくらゆき格のるを持く。はく後お
のれいのるをえて白づみよあひゆきやこくの中弓
う切りえありばすれく

りや 前うわうりや火桶乃様云々

存美

是ハ少おけのちでんあそらす。やと切り

まゆ 人情によ笑まや矢瀬の郭公

格栗

是ハ多角のあくまん人情よ笑まやと切り

りや 桃色む日和も歌。や村時雨

彦川

是ハ村時雨まつむ日和も歌。やと切り

●掌子あじくもあきや彩雲象

是ハあじ。やと下べきを段重のき。小写一邊りう

又切りやみ竹ともうろびる難のやあ。す小
物

是ハをもうほ浦乃夕あきよやくやうはれ應も。うれ
やうそ切りだれハ切やすうちひ安

是も。日乾とてくとをやとうすげうか

次

下切れぞとくづてとくづてとくづてとくづてとくづて
やまくづてとくづてとくづてとくづてとくづてとくづて
二の内上三字目又四の内上三字目五字目
るやうとくづてとくづてとくづてとくづてとくづて
とくづてとくづてとくづてとくづてとくづてとくづて
とくづてとくづてとくづてとくづてとくづてとくづて

下知を切るをえてやとソノモ切るやこ

けや

下知や種もと一トモ無よむ。中花茄子

生

是ハ秋涼一氣あるべし毎よむけやとゆう

形はれ達

花はまざるをみゆどん新あくへやくや葉もとあもん

是ハ上へまづ下へまづとちりん葉もとあくやとゆう
えをくわらへとくづひの向よまざく安あめどおぢや
下知や強もとまものうちくちぬや極もとき

加生

是ハ樹もとき。新もと枝もとれと下知を切るや
えてやとくづりこむくづれおじ下知を切るや
トリもとからや

下知やあくとてや蟬も音もゆゑうほど

其角

是も蟬も音もゆゑうほど水うてやとゆう

新弗

下知の圓乃とまざりふあれや

是ハ皆もれもとくづけをとくづけをとくづけをとくづけ

圓守もあれやとゆうとゆうとゆうとゆう

月とあどりくは譲すアとゆう

下知や翠鳥乃黒とアキヤマとゆう

吉成

是ハ呪ちどり翠鳥の黒とアキヤマとゆう

下知や山ア一海よ元よアキヤマとゆう

吉成

是も山ア一海よアキヤマとゆう

新法とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
くづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ

新法とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ
とくづれとくづれとくづれとくづれとくづれとくづれ

以下効玉を切るをえてやと切く、もぐて歎息のやといひて
よされとちりじていまきくとすあふられば下効玉を切るをえ
てやと切く、やとりべー是をもとざしまつてやあどんは
まなたぐりもどり捨るやうすゆめゆらもせ切く、命と定むき
ばすきうすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす

○歎息のやハ切く、命あれどもいキよ國でやけよやけよ
ノリやあくはたゞき多ふを切れど歎息のやハあくまき
つきて月と切れば月々や君月々や夏月々やけあくのれ
は切れど月づきを日れもすやきどのもひハ既生のしや
あればかくこ

歎息のや

是ハあげくとまきて切るやこ

むさんやか甲子下のまくらに

是ハうさくの下れすりへもひさんやあとゆうもくべ
切く、歎息のやハ月ふやのとくふをあるねとあれば
向ふもひさんやとくふを切くを下へおとほりまき

持める世の木板や 楠もくひ

莫太

是ハ木をくし捨るやう世のうりよやのと切く

秋の風

枝風

ぐくうとぬけ初る歯や 秋の風

枝風

陰陽や疊のせむり 耳共完

丈牛

是も疊のせむり三井の仁すす冬すす

其角

かくじく三井の仁すす冬すす

是も疊のせむり三井の仁すす冬すす

水すす冬すす冬すす冬すす冬すす冬すす冬すす冬すす

素丸

是ハおきてそよてそよてそよて

水

ちりや麻の葉の秋乃風

越人

是も麻の葉の秋の風ちりあやのとゆう是が始
物のまちりあやとゆう

散も又綺うものや 茄麦茶

吐月

是もさばの花ちりあやとゆう

豆乳や 茄麦茶

探丸

豆乳や 茄麦茶

湖春

是ハ蓮よアリて唐松もべりやあと切りまへて
くめりや高き中れりや豆乳や豆乳や

豆乳や松を花とも社とも

素堂

是もねを花とも豆乳や豆乳やとゆう是が
つれそやとゆう散のまく

涼しや田よあけて年々

元末

是ハ田よあけて豆乳や豆乳やとゆう是
は下ホダリとあり下ホ上ホエリて切り、素堂

名月や 緋を枕よ合歡の花

羽人

是もひさを枕よ緋の花名月やあと切り名
月やとりひるふがむらやあらハカレギテミハ下
トドケリて下ホ切り尔あり下ホ切り尔かくて切み付
キありハ九十六干の格あるよス

尔も落とせどもれやまみ

素堂

是ハまみ体多と大きげどうれやふとゆう

かづむかづむ年や不一うら

碧水

是ハまみ体多と大きげどうれやふとゆう

秋風やうりまくの一葉す

素堂

是ハまみ体多と大きげどうれやふとゆう
かりそめの叶葉よりといふが散のまく

其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
百日而生。百日而生。百日而生。
里裡。里裡。里裡。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
仙。仙。仙。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
潮水之源。潮水之源。潮水之源。
仙。仙。仙。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
湖。湖。湖。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
流。流。流。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
太莫。太莫。太莫。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
流。流。流。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。

其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
湖。湖。湖。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
流。流。流。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
仙。仙。仙。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
流。流。流。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
山巨。山巨。山巨。
其角有仙也。其角有仙也。其角有仙也。
是。是。是。
仙。仙。仙。

ほの聲を旅の姿や 約むクヒ

前半

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

常秀

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

源蕃

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

源蕃

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

源蕃

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

木阿

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

木阿

是ハ約もシテトビモ旅の姿アヤと切クヒ

旅あれぬ刀ムシヤ村志ヅレ

木阿

○ 欲息のやハ歎息のまよギテ切クヒ古の往々あまシテルハ

引吉アリと云て云々と云ふくもく歎息のまよギテルはの夏乃ニヨリ

千載五月五日またお茶油めりて「おまきす」の酒をまよギテ

云ふらよがまきくて「おまき」又欲息の坐トリ

アリ

欲息のれや

是モヤのやホのまよギテ切クヒヤ

れや 時ハ今花の季節也や風

宗祇

是ハ風もアリトカナ格アゲテトドリ上ヘテモシテ
風もアリ時ハ今花の季節也アヤトカナコレラモ
切クヒ格を多リモキノツドケトモシテモシテ
テモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ

アリ

れや 西風もアリ寒風也アヤトカナモシテ
是モヤのやホのまよギテ切クヒヤ

其角

セツアルドモ多々ハ切られやのとて下もむち
詞あれやハ石ある下もむち词ありやハ
れバモのとのれや

度き
上 父母うとびて、おふくまきうにとよへあれや父やさしと
夫うとびて、おひみたまう小父やさしと
とくあれやのと切りう是はかくす格三つをも
りれどもとばづきて切る所、
一

母母
母もかく格をあへれどり下よりもうべ
てへどのとふもかくもせんくま世帯、
きあれやのとくままでや

歌ふとのをや　是も切るや

母母　カムトヘマニテテモ津世タマシカムトヘ
是ハ母がきの代へてかくらうごのアガキハシ

まがりて下をむちびゆてむちぶ格

切る　さきやまふゆふをやと日比月

蓼太

是ハまみ内まきさるある子川をやとくらうて切
る

切る　在ふねよ雲持せ前やと月

双禪

是もくの月のゆふまきせをやと切る

切る　ちく峰ふ雛帽子若木や古松川

蓼太

是ハ古木ぎ川をめくす所、きやまく切る

切る　年のみ縁香買ふ止物やあ

毛歌

毛歌　そのみ、あはは神むちて土崩の處よおよいを

是ハわのう牛は袖うちて七片の皮はま
人をちせよとくらうて切るをす
ひうちひのま

古今の物語もかうなんばくまほまくはるやの声をゆがめ

はあんのすのすんそスベリヌギのきのすん
ほのあんハシのや競かのうりせぬ時と
むまびよある引とくひーこまくらから
時ハ前めとあまよ格子のすの音のとも下れ
をやみてゆき

めや

是もやうやうとくとくのくるやのすく
まぐてへんやまくもやのをめや

め

壇近す妹よみれや 凤涙 其角

是ハ成つう壇近す妹よみれりやと切きを玉て高め
めや、是れハゼオドトテハキのうるやハのきくまで
割や、命、引やとひ附ハシハキのうるやハのきく
引ハシ。をもとてよもびーと、と、と、と、と、と、
さく、さく、さく、さく、さく、さく、さく、さく、
是ハ秋あきせや。さく、さく、さく、さく、さく、
是ハ切ク格うをあれどもとまくとまくとまくと
はりと

やいのまわや

是ハ切クや

やいのまわや、存ぐのとおづまかば、うづびまや

越人

是ハうづまわや、寿くまば、うづびまや
かづも、阿ハシびて、まわとく、まのうるやハのきく
津井原をあくまき、まのうのまをうこと、やしきや
是もやしきやまや、おけしも、けぬあをと
うくまのうるやハのきくや

うや

是ハ切クや
うや、却里ハまか花守の子孫や

をせ代

是ハシテノ候事のとある。名モトヤカナ

玉系已テヨキ時モヤサレバタキヘテ我あヒヨ、以テ其のを
是ハ上ヘテヨリテ已テヨキ時モヤトヤカナ

是ヨリ下ヒテ、アガヘのやもアバカヤモア
カバシヨリシカモカモリスル新のやとリスル

マニ・ヤカニユヤ ヤ何ヤカヤ

トヲ詞を序モサシのや

外六 あつ山やく浦うてタ 涼

マニ・ヤカニユヤ

ミセ

是ハ浦ヒリカナヘヤクモアヒリモアリ。詞を立て
アツム山やく浦ヤニ・ヤカニユヤウキ。タ涼スとス
ミキモイミツハ外トナカリテ涼シテ。シテ
アツム山やく浦一言入テ。は三トナリ十八の格。
叶ホシのや。雜のや。ヨリ切れどはちぢのナナ
ハあツム山よ。アリテヤマキモイミ多キヤ

定家文集

ヤ何ヤカヤ

ヤ何ヤカヤ

ヤ何ヤカヤ

おもだうや。も來ます。るかまうだる花かくじく——うさ向雲。
是ハ深山や。も來ます。る杜も。ヤ何ヤカヤの
花きこち——。あもるあくも。ま。と。る。そ。こ
そ。の。ハ。浦。う。か。り。く。れ。ば。外。の。く。り。も。自。駆。と
あり。と。下。へ。く。れ。と。二。字。入。て。坐。ま。と。

よびうるよれきのや

よび

うるよす。カレサ。ト。向

粋

十六 皆善事や。ソレ時あれ。ソレ。迎。

周指

叶ハよびうるよ。のと。す。カレバ。け。や。を。と。て。俗
語。モ。ソ。ド。叶。松。や。み。ま。く。き。り。を。せ。よ。と。ソ。び
うるよ。れ。え。の。や。く。の。セ。よ。と。ソ。ハ。下。わ。の。ま。す。て。切
き。の。よ。く。是。モ。な。ま。く。て。ほ。く。る。よ。れ。き。の。や。あ。る。す。を
切。ぐ。そ。の。ひ。ハ。く。と。巻。の。角。う。つ。ま。で。迎。と。あ
た。下。へ。そ。と。一。字。入。て。よ。び。ひ。て。と。ひ。く。る。ぞ。の。引。を。そ

を食すまでもナハの格とナハの格の上はかくハ難
と外とのことをあさて置のや。ソシホのうりナハ
の格ア。あれ三のやのよハ

重え集
ちまやぢるゾーの宮社神の約束ふのり。やたりもどまる。

是ホハゆめふのり。よりのとのや。そけれひの
やハ桃葉ふかーさればみどりよハキモト
きるくもきのよもよどり。ギヒハ。よどり

よどり

夕方や因とえめぞうれ神あづ。其角

けやもよびうるよのとれやとせゆ是もおどりやの
やうすあれども今ある夕の時、はやとそびえれど
見るの有あれば面を教ふきあるゆゑよ。れきのや
やうけ夕の日のひ。御あづ。と余情をあくまで
あくまで余情ハ。あくまで余情ハ。そくを

下すあくまやうり。らをよろで下す余情をあくまやうり

松林

奇ハ

是モ西山の山のあくま。うがりかく。と

りつ初を余情す。あくせうりまきてらまー。
とつふくらばらとくわをのぐく。初くらまの
反らくら一枝えりくり。枝ゑらとつめ
子のばを庭てらばつ。あらこさればけり。先
とありくらうまをもくして御あづと多れま
をあづ。又余ものう。

解説法師の兩乞の歌

この川萬代水よせまくじ。にまくじ。また神あづ。神
是ハあまくじ。また神あづ。神の川
あづ。あまくじ。また神あづ。神の川
浦よゆふをもくめてあくま

小野小町のあまひのう

もとやがる神むしよまきばちをとせきこの戸川乃極はけ。

このらむめくら。ト神の御すてありこうこそ
もと神をたゞあめのとおまが其角ぐら
神あべとあらへりとくはベース多うや
のやハ今かみみ時ハタニヤヒテス多うや
ミ乃門アタシヒリツベー。まれきのやハ
ミムラユハツヒグト御のよ。切れどもよ
がく門と御がふきのよ。切れど

あがむるや 吳も難のや

○是ハもとまつりてくろびるやあれバ切れぞ奇よ。國
那名所地名のよそにて外ハモトトヒルの事例
もあらひてよけや。もとひゆのや。もとどもと多るも
ケめきともされば。あらも。と。り。か。一。切。る。向。あれ。四。三
ア。初。手。あ。定。り。又。あ。も。し。や。の。ひ。よ。切。手。あ。キ。ハ。十。八。九
三。一。の。格。く。け。や。ハ。キ。主。ア。さ。あ。ま。う。て。生。一。の。海。よ。す。く

あく用捨差別あくぎや

△ 元日や。神代のこも。おまわれ。

守武

△ カキナリや。余を。も。む。さ。か。ら

守武

△ 是ハまづく。余を。も。あ。り。是。も。外。の。う。り。も

守武

△ 名月や。柳のえ。秋室へ。あ。

守武

△ まつゆや。萬葉抄。露。月。

柏之

△ 月や。六月も夜の夜。月。

柏之

△ 草の戸や。暑と月。よ。う。も

柏之

△ 月と外。う。う。う。て。あ。と。か。う。

秋峯

まち面や。やの巣はまやの漏

まめ

是ハ空枝のまゝその葉つづふとゆう是れがとあれ
ども枝のまゝとつまちれハ巣とりゆうかりてかと
切りてからむ外のうちとつぶ卵とりふがをのや
巣を外にすれどかとつまむと間のまゝうかる
をも一ツ外のうちとくねべりがとひまことばせや
みゆよツリ

蝶もや。魚もや。蝶也。

まえ

是も外のうちと、既生のトモテゆう
むすび日や。思ひぞづる故一も。 吐月
是りとおもひぞづる。かくりあがむや。されが。を
を巣をかふしありてもさりしと
梅が香や。酒の匂の如き。 まき
是の匂い。うき。一き。ゆう

蝉鳴

鬼灯や。うれや。秋の染てゆ。

漁火

是もや。かうり。とく。ゆう
と藻や。と絹。あらわすよ。 しゆ
是ハ外のうちと。く。ゆう
ちの岸と。き。れ。ば。の。 あ
むす。ゆ。月。う。れ。と。ひ。れ。 る

波聲

行秋や。葛け。え。も。あ。む。げ。

吐月

是ハ外のうちあれ。ま。と。ゆ。う
駄杖や。馬。よ。り。え。も。た。

人左

是も外のうちあれ。ま。と。ゆ。う
歩女や。な。く。す。れ。る。林。ゆ。

東北

夜のや、鶴脛ぬれて、あゆ。

喜

舟のよ、月の歯のうき。

喜

是がつうかりばほまのトヨシカ
はくら底の桜笛のまきよをもとをもくろひのる
ともひよせくらとよさむ。

歯のあしゆふくいあさんとたうすあめつゝま
り持くさざくもとくしゆくりばくみが
けぐると下界

くわくわくよくわくわくよく物語あそぼうする
ゆくくすゆく物語あそぼうする物語あそ
くはく語あそぼう著聞古今六帖ま木抄キホク傳記
連うえ安らすもんあるべきあり

末日や何よたとん朝がく

忠知

是があさがうけゆくよくはくじりかくちうて

けくらに捨ま葉か

世の中を行きたとんおさがけきゆく舟のあらのよくは
らの二のう三のうをくうてまとうたりむくとくを
はくかはくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

膨張や湖のよみと月

吐月

是の水の月やくうよこゆうり 月の何よく
たれをも外のうりよ

夕景や秋の色やくうか

在哉

是のようかりてうぶとありうりの上のうり
引あとゆくよくはくうのと外とくりせうう
ひとおゆかくアリかとありうる例ありうる
うの和ちうよくはくとよくとよくとよくとよく
うの和ちうよくはくとよくとよくとよくとよく

ゆれぐらきのあをひふくひのまされどもは格ハ俳諺の安
白あいやれといひてその法あり至ハ引の御子
志をもりてはあがむや和下よりあべや
不うれせりづもる

あがむやの下よ切りを行ふすハ

△おまきやああれ花を吹くよ風。園の松もく
是ハ園の松もく風。さうもと方よりうへ

てゆきまくは是あおぞらからてせん、切り

△大原や、をほの山もくをハ神代のくもとひづく

是ハ引ひよりかうてめく切り

△引東、
舞は海や、月のひくはくうが波の巻も秋、まろそ。

是ハ引よりかうてりと切り、ねじよなぎ
らくてあがむやの下よ切り、あも格をわら
金

△あがむやお勤め聞かてゆきとハ十九二千の格

十八 灌絶や 因此を守氣

反考

是ハ外のうりあれば、氣とありて下へせと一言丈
てて手を度を拿を拿みとくナハの格

十九 若代や、筑チ多カモ、綱、主ツ

越人

是モ外のうりあれば、一ツと算りて下へありと三字
入てゆきとて十九の格

二十 高き處や、手も別ある、所

宗因

是ハ引うちりあれば、手のうりと手とありて下へありと
二字入りとてあをとせば、拿みて坐みて十九の格

二十一 晓や、歴の半くさり。

終

是モ外のうりあれば、茎とありて下へり、と二字入り
つともあをとせば、拿みて坐みて十九の格

二十二 あ月面や、也へまち、ある物

詩

有佐

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ
よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

△十九 莖山の酒食時^{モモ} 道友

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ
よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

△生葉茶 小豆^{モモ} 三月の朝のくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

二月の朝のくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

△古昔の酒食時^{モモ} 一井

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

左の手 おひるのまつたけのくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

●のくわ

●苗塩を体にす

●風のくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

苗塩を体にす

●風のくわ

よもやがのうかくはすこしのまつたけのくわ

○切りやハ上よ切事を文てやうじ。切りハ上よづく口を
文て外とソラ又ト下ふむまび切る。外ハ上よ切り格を文て
外とソラの事。ハもまびをたゞすせども。文事。スミカ
ヒの事。もまびもまび。やうじ。がみ。かみ。文章。スアガ
もみじかくもまびれども。の切。あく。まよに。うて。は柏子。内
もまび。とまきと。うて。外。外。あく。もまび。とまき。やうじの
所もまびれど。でも。又ニ字ニ字。近事。事情。を。根。例。外。の
を。や。と。得。ある。が。う。と。人。内。得。り。よ。あ。と。そ。緑。の。既。よ。あ。と。
あ。め。を。改。め。ぐ。の。科。あり。

○やハ外小紙。もやうあれども。ハ。もまび。が。ふ。との。か。う。き。も。あ。り。又。テ
ク。ホ。モ。ジ。ミ。ア。リ。も。ま。ビ。ア。レ。ド。ソ。ジ。ヒ。の。や。の。ミ。ハ。指。量。一。ト
ホ。ウ。ア。ヘ。ト。シ。ヒ。ア。ユ。ヤ。ト。ソ。ミ。の。ア。レ。ハ。モ。ジ。ヒ。の。や。の。ミ
ホ。ミ。ミ。ハ。ト。シ。テ。ク。ア。レ。バ。ア。ユ。ミ。属。ミ。キ。ト。ク。ビ。ズ。ル
引。寄。や。世。ア。ラ。ク。シ。田。詠。唱。ハ。キ。幕。や。リ。九。日。と。即。ま。る。

○燭。持。や。コ。モ。れ。て。づ。下。外。湯。炎。や。と。う。キ。イ。メ。る。ち。の。1。
梅。手。や。前。待。お。ん。を。う。む。ら。貰。あ。や。門。事。ア。リ。く。そ。の。月

○是。お。の。う。ぐ。り。の。や。ハ。と。の。そ。だ。る。よ。ハ。あ。ね。ど。あ。、
く。」。け。因。理。ハ。れ。い。を。あ。ど。り。り。ひ。く。よ。き。而。ヘ。や。と。あ。で。り。
二。ハ。下。よ。や。を。並。が。き。ゆ。ゑ。よ。と。並。す。り。と。く。一。の。う。つ。す。る。
う。く。ぐ。り。の。や。ハ。事。を。あ。り。や。へ。や。あ。ど。の。と。の。う。い。乃
や。あ。り。物。う。ぐ。り。の。や。の。事。あ。る。ハ。

○座。ひ。く。と。山。や。く。れ。ん。毛。程。

外。

サ。

○燭。持。や。コ。モ。れ。て。づ。下。外。湯。炎。や。と。う。キ。イ。メ。る。ち。の。1。

風。小。匂。い。や。づ。け。ト。か。く。花。

風。

○燭。持。や。コ。モ。れ。て。づ。下。外。湯。炎。や。と。う。キ。イ。メ。る。ち。の。1。

風。小。匂。い。や。づ。け。ト。か。く。花。

風。

○燭。持。や。コ。モ。れ。て。づ。下。外。湯。炎。や。と。う。キ。イ。メ。る。ち。の。1。

風。小。匂。い。や。づ。け。ト。か。く。花。

風。

○燭。持。や。コ。モ。れ。て。づ。下。外。湯。炎。や。と。う。キ。イ。メ。る。ち。の。1。

風。小。匂。い。や。づ。け。ト。か。く。花。

風。

唐の歌詞を翻訳する
日本語の歌詞を翻訳する
日本語の歌詞を翻訳する

歌詞を翻訳する

六〇 ② 水月の歌詞を翻訳する 村井 不角

五九 ③ かの歌詞を翻訳する 田中 由
村井

五八 ④ かの歌詞を翻訳する 村井 由
村井

五七 ⑤ かの歌詞を翻訳する 村井 由
村井

五六 ⑥ かの歌詞を翻訳する 村井 由
村井

五五 ⑦ かの歌詞を翻訳する 村井 由
村井

五四 ⑧ かの歌詞を翻訳する 村井 由
村井

其の七月正油あり生て赤板
ひく古きやかよ赤板やとありうち小草ニハ赤
板トあり是ハ西ノ

青柳の部シテ松立ニ有月 其角
是ハ音の月青柳の名の様シト切シ

見ぬ事多カレ皆此ノ時也

英太

是モほくまにあまとこがれありくわト切シ

ねを向の月が近シテ郭公

藻同

毛もほくまをアリの月グナシケト切シ

風ニ一日北方のあまももるカ

詩等

花の雲縫ヒ上仰シ湖岸川
切シ務けシムキタツヒシテモアリトのうニ切シ

詩等

萬代より里川の流りも

其角

是ホリ外を四ツ子ヒテリ是ヒテ外みて切れてモト
添リケルヒテリテテテテ添リ切レヒシムホリ里道

サモトシタエラベ一

詩等

古今

秋の月山辺モヤモテモヤモテ彦の波の波をミトウト
モホリナキリナムヒリ様の花ちるをモヤモテモホリナ

モヤモテモホリナムヒリ様の花ちるをモヤモテモホリナ
モヤモテモホリナムヒリ

古今

秋風のゆどよたてらモヤモテ彦の花クモホリ波の波をミトウト
モホリナキリナムヒリ

天の糸アリモケレバモホリ波の波をミトウト
モホリナキリナムヒリ

是ホリモト切シ

うきのうきハ

□モウタマヌラト

空うべ馬糞の糞ノ負ひ方

周木

是ハナムジの扇の御神。六神のとがエハアシヒ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

うれ

おをめりとソリツ體を喰ぬハ

木阿

是モ物モウトソレヒテシテモモシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

酒若

我ぢふくとよをまよてゆれが生ぶの義乃千枝をもの

是モ物モジの義のちえハ酒若の歌よあき

シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

千枝

シテ

是モ物モジの義のちえハ酒若の歌よあき

是モ物モジの義のちえハ酒若の歌よあき

が乃部

六毛

やまもすづれどもあを雪れめ

探丸

是モ物モジの義のちえハ酒若の歌よあき

シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

同ノ格

シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

六毛

郭公あり風ふ雨すある

利牛

シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

望雲

る

萩彦月ハ細きがあもれある

也

けぞくむさび河ハ弓のや製のむさび河ト
格も又箭もむさびをもくよせざるゝとおとし

ベ一

ねき

秋の田モ稻モアモトクナバモアモトクナ
モタスベをたーうおせふハ
秋の田モ稻モアモトクナバモアモトクナ
モタスベをたーうおせふハ

歎乃部

歎とハソウツクレソレハリハセイハシテハ

アシカシトアギリタガ

アシカシリソルシナリタマシタマシタ

ハモツメムスルサ

六八 時あけぬく 浅田の橋

夫仲

古今 おちを無のまづよきみをて何ふ事を即くあがひ

六九 たれへう薙若てあやし花のま

夫仲

是ハ空のまづよきみをてあれくすまにとあれど是のま

トよハこそをもてたれくすまにとあれど是のま

六十 初時あよひ出しけりぞ

端水

狹衣

是ハ初一ぐれけくぞよき出しけりぞ

ひとがくすきり無バぬもやもまとあどニテヨモヒアヤタ。

六一 こせ方ゆへいふ春とく風の音

破笠

是ハ風のまづこくせはいふ春とく風の音

金葉 友の友ハ月待りのまづこくせはいふ春とく風の音

六二 人あよちるとて居ぬけし光

岸水

是ハケーのあよちるとて居ぬとて居ぬとて居ぬ

金葉 友の友あよちるとて居ぬとて居ぬとて居ぬ

六三 あよみぬは誰とうちのぶ女郎花

曉山

是ハをまれへあよみぬは誰とうちのぶ女郎花

千載草むきとひかへてかわうふ。氷をきのち。めきもす。

六 む わ月あハ何を茶そも津の人

鞆石

是ハ渡のくわゆるれ。あ。すを草そもむ。とゆく
たれ。ま。あ。すをう。すむ。よれ。う。か。お。と。り。も。せ。ど

是ハあ。すの。ま。れ。あ。か。お。と。り。も。せ。ど
セタ。あ。すをう。や。じ。と。切。き。そ

六 むん あよ魚のうさーに。並ん。葉絃技

若良

是ハさくのうさ。魚のうさー。すが。へ。と。か。く。

六 むん 郭ふどねく。ゆく。せの。度。さ

柳風

是ハせのひく。と。時。く。れ。う。す。ん。と。か。く。

六 むん 鰐うり。うち。る。人を。醉。そ。ら。ん

喜雲

古今を。れ。べ。ー。秋の。せ。風。す。ら。ま。び。き。く。ひ。く。つ。が。し。れ。よ。じ。ら。ん。
万葉も。う。よ。ん。を。ら。ひ。そ。て。い。あ。く。ん。づ。れ。の。日。あ。ま。く。よ。く。よ。く。ん。

古今 流川あ。すみ。か。上。を。下。ゆ。く。ん。あ。す。よ。く。の。あ。が。あ。り。く。り。
是ハ下の。け。ん。を。切。く。く。

古今 ま。る。せ。の。あ。大。の。す。ま。り。で。不。よ。今。く。自。ら。り。て。ま。ま。ま。つ。く。

ろ 蝶の。ね。れ。ひ。く。と。う。こ。か。る。蝶の。ゆ

喜雲

是ハ蝶の。や。ね。蝶の。ね。り。く。と。う。こ。か。る。と。か。く。

六 る 風乃日。あ。す。う。た。る。時。鳥

松風

是ハほ。き。く。風。の。日。ハ。行。ふ。う。く。と。か。く。

三

舞。舞。舞。ふ。く。と。び。持。と。折。る。

喜雲

は。う。手。ゆ。け。り。と。あ。れ。ぐ。是。ハ。写。一。渡。り。あ。く。と
か。す。舞。う。り。か。り。て。り。と。あ。う。と。う。例。部。座。格。の。可。す
お。ま。と。ゆ。一。家。ま。れ。ぬ。め。ぐ。れ。よ。づ。く。れ。高。の。う。る。袖。あ。り。は。

舞。舞。舞。ふ。く。と。び。持。と。折。る。

喜雲

是。シ。舞。格。す。あ。り。の。下。へ。げ。ん。と。ニ。ま。て。て。ま。ま。く。

同

此卷之文皆出於此
古今之文皆出於此
古今之文皆出於此
日 月
日 月

此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此

此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此
此卷之文皆出於此

がまくゆふよむまびのとおもひうへておこゑ
てまくはり是下つぶる時おもむくてあらひ
とすがみだきのや類おもてから時ハハキ
いをも何ハリきとももぶ格く外おもむく時ハリ
とおもむくゆうじきとあらじびーと祭
のアモトモモ橋モハキハトモ院をさる双生

古今 濱はせのすま渡ハアリとあらじびーと祭
吉

海第生れゆきの候ふあづれどあらじびーと祭
也

五
西霞に雲すわ始り。山脚の香刹。言

五雲の。ハアリユハツメ格すれどぞのや類トテ
ウム財ハモモジトモリテヤク

一
朝霧よし宿出。傳使。其角

是か後使あさぎよりつありそ。ヤクシ五雲の。ハ
アリヨハツメ格あれハ前りそ。内度とづくやまくれ

二
上よりおもりよりて上アリ諸下アリ諸のゆき切
ざる而も人をきくべ

トテ
三
あよぐがあでぬきうけ。うちをゑる秋モニサセをよなだ。

四
花うも人をあざりふれづれをよきふ事んと。尼

五
月あ花たれかとえゆけ。高麗山。起石

是ハ月あ花たれが高山た。わくこえゆけ。トカヒ

六
高きの極行山のハキモモうづれを元と引てを

七
東山や。とづの松れうちもてりくらきの下ふくら

八
朝の徳白詠の。ひもび句とあるふかとつよてもおはなれば
九
さくさくよもとくべ。題言ももひもとおどりて下のひもび
十
かくを約するがあればけゆり。アス歌言を御み詞をて
十一
萬もハ十八九二十の格。是ももけゆり。アス

正秀

九
卷

通路

九
卷

通路

十一
卷

龟林

十一
卷

井

十六
卷

格

十八十九二十

ふりかけをとくまくらるねんじで一いれが下が
ゆきのまかせへ保りそ

し巻の下よりとある

は紙

多あまとり。あくへてかあく葉のなまこ巻みわるおこせも。

けつぐと巻のまくみのうのせる。とくうりたう

さうた。が里よがれをとてかちうちたごくやもせんする草。まると

是とたがのまく下のまるとくうりたう

うまきどくまきむし。花のまくよな。があほ。うみ神。あれつる

是のまく。巻とまくまくじ。泡のまくよかくふ。

又巻のまく。やとくりてとくのまくまくじ。

まく

ま木。我ちうきが。まくわんあれ。まくわんもぎ。まくのび

まくで巻の下よ。えまあると巻の下よ。文字を

はたごくあれば下のまくまくじ。及とあるねあ。

ばうくまくの角あくとまくげあ

まく

く。ひりきよれくは天の戸ト。やまくらん。

イツミニ

けりうとうとりふの里倍ハ [イツミニヤラ] イツカく

[イツカく] とよとあるハた。初あれば下のまく

びふくもうちけ。下ふくく。びのや。あくまく

坊。あく。又 [イツミニ] こりくとのまく。まくハ

下ふくもくび。向ある例え

角

まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

金

まく

まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

叶ふ事と云ふ事ある。たるところである。あ。つ。ゆ。す。
サハの事は上より辭をうがひの所。あらうかる時ハ多
くありて、あらんのそれ前がうるをあら。周防も皆
りんと、うきをなるものあり。されば是は本ハ曾
御人の事の前と見るべし。らむの及ぶ。

ワヒタキモムカシガ格

四

めりくと落葉を何と神舞

貞徳

是ハカツトと落葉がある事とも思ひ難い事あると
神舞(ワヒタキモ)とのりけり。トテナシハ古事
記とあるが、御名は化者の心も御心もこれで奉
く也うと云ふ。

四

ソノ小稻をテハ瀬の大井川

其角

是ハワヒタキモ稻とほれ川の事也。とあるが、まわるを
大井川(ワヒタキモ)と云ふけり。由來は大井川

四百四十一

ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は

金井茶
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は
是ハニ茶の茶の千代の茶の茶の茶の茶の茶の茶の茶の
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は
ソノ小稻を不近瀬や大井川とあれば、是の事は

此の小稻と何の何

是ハもむかび等及ぼ

あ。おれ。あ。と。ま。く。の。御。帰。飛。飛。

木山

是ハうち花の木と聞ふ。と。か。う。是木を。の木
の木。あらんと。う。を。あ。る。を。あ。ら。ん。と。う。木。を。と。あ。ら。ん。

日出

かく年をたれもあ。と況て、主もあまびてかう

く年の白髮の神乃むりうゑ

去ま

是も御と殿仰あれども下よもとらればたゞ仰あるをも
下よもとつゝされのゆかり玉て御とありてくけら
を吉原村太宰府奉納の事とありて
許六云五句切字ニツ用すハ怪あり

け句切字ニツの病あり

と行れども切字トテハ子との事、下を切ミトテ
をけ句引ふと切字の事で切字ホニツハあ

て殿の事と切字をへどもとモルヒタド仰あるおこ
引吉原もるくへづる本筋表。つる山筋ありと
是の筋表り。へきある山筋ありと。正年れ
そくくざくあと切字とく毛ホハ切をふて
角字とく切く又

五十七

二〇

是の事とあすが、さねが去来がくハ筋もあく

許六ハ人じむむる御坐あるあくとひがくとく
るゆごくれくをとすまえ御の比ヨリもくわく
ゆとくづく

吟よりよみくび

是の事とあすが、むとびく未及

誰やうがひゆ御り。今朝の事

五十七

是ハけよみとれやうが、あよ御くとゆくとゆく
ゆく御ハ人じむむるてよきの人をいれひぐとく
ひくをとくよのひふくあをうもあくげ、かよつこ
もあどくらはくのひのまふあくがれば是もうをふりよ
御とく

古今

もくちのまよもくちたれぬまざれをよあがくあく
是もくちをよりよ題玉とくよ人よ對して地の人を
これゆゑよみくびく事すよとくよふれとくよ

主あれば地をさすよとけひひたと約すて
下のむまび不及

あよほぬ小土手せ茎うす

忠和

そありあよのんもつみよとよもあればまびいの行
あぐにさびのとあれば地をさしてりよ斐あれば
下に引まもつるきあり

風雅

人きれきぬふがくてもなまほしきなりぬだまき多
くふくもあよのうしもあくといふまうれば斎の行
少ともさびのとふあくされば下よ外とより
ひきくもくらハ行うかりくられば外のう
多く外とありゆ

切子類

切子類

笠立行やりづこ五月のぬうは
是ハ五月のぬうをうた行やりづことゆう是ハ上よやと
サ

ひすきよやりことかくもむく
日よすきよげやくたむ月々舟

其角

是ハ月々舟をよとむだげやくられくゆく

麗玉

玉ゑみ母至れ壽戸のきハ誰

其角

松毛り体物かくお買ふ人ハ誰

昌雅

行そだの本社ハづく其事あき

其角

是ハ本社を行そだの本社ハづくとゆうと
行ハ切子格子下よもじあく前もれ

主ハ淮木綿あくよ秋の魚

尚白

是ハ秋の魚あくよ秋の魚ハれくゆく

花笠と意者と細金人ハ誰

其角

古今
即れの小あやづことあざれりまの流分仲よいで



饒古錄 上巻終



是ハニトウラギの残のあまむけ仲ヨリテタリ
れの小うやくとありて
は秋せり中ハ「い」と。いふ風の音がさくする今ハ音のやうす
是ハ風の音をサヌも今ハねやかれてき世事ハ
いよやいよと進んでる

